

ホワイトヘッドの『シンボリズム』(下の二)

細井雄介

**On Whitehead's "Symbolism" (cont.)**—————

The meaning of the word "symbol" is extremely ambiguous. Since most dictionaries fail to give a clear definition of the word, I selected the authoritative *Encyclopedia of Philosophy* (Macmillan, 1967), and carefully examined the article under the heading "Sign and Symbol." But it is to be regretted that the function and structure of the symbol remain unclear. In order to have a complete grasp of symbol as a whole, we need to conduct a more profound philosophical investigation into the nature of symbolism.

Susanne K. Langer is famous for her study of the subject. I think her ideas as they appear in *Philosophy in a New Key* are based on the insight which lies behind the symbolism of Whitehead. A thorough study of his thought is therefore basic to the understanding of contemporary philosophy.

象徴という語は多義的である。欧米語 symbol の訳語を辞書にもとめれば、第一義「象徴」につづいて第二義「記号」も記されており、たちまち「象徴」と「記号」の異同如何が問題となる。そこで、これはもはや辞典の次元でおさまる事柄ではないとみて新たに事典に赴けば、哲学的論議の紛糾にまきこまれることは必至である。しかも知的探索の彷徨のはてに納得のゆく結論を得ることができるといえば、まずその望みはないのが実情であろう。象徴操作の営みが人間の本性と不可分の一体をなしているからである。

実例を今日の代表的な哲学事典のひとつにみておこう。The Encyclopedia of Philosophy (Macmillan, 1967) では記号と象徴をひとまとめにして SIGN AND SYMBOL の項目で William P. Alston が執筆している。かれはつぎのように書出して、問題へ迫るに、日常言語の用法分析を重視することを明かにする。

「言語および言語学的意味について考えてみると、多くの非言語学的現象が重大な諸点において言語に似ているように思われるという事実に驚かざるをえない。身振、ベルの音、呼子などのように語や文のそれと全く似ていないわけでもない慣習的意義をもつものが一方にはある。他方には、バルブの故障を示唆するエンジンの異音のように、あるものがいかなる慣習とも全くかけはなれた何ものかを意味したり示唆したりする場合がある。そして両方のあいだには多くの中間的な場合がある。多少とも言語に近似する現象をとらえて、双方に似通う点および異なる点から言語を照らしてみるのが有益であろう。」

このように述べたのち、およそ記号サインなるものの一般概念を得るために、論者はつぎに掲げる十四の文例を並べてい

る。これらは相互に微妙な差異を秘めているものの、記号乃至象徴の機能および構造の明示という点では、いずれも  
 相等的な権利をもつ典型と考えられているはずである。

1. A rapid pulse is a sign of fever.

急な脈搏は発熱の徴候である。

2. A hum like that indicates a loose connection in the wiring.

あのようなたんぱんは電線の接続ゆるみや不良を示している。

3. Pottery fragments are a sign of human habitation.

陶片は人間居住の痕跡である。

4. When he starts working nights, it means he is tired of you.

夜に働きたちは、かれが君に飽きたらうな意味がある。

5. That is a diagram of a high compression engine.

それは高圧エンジンの図解だ。

6. That is a picture of Aunt Susie.

それはスージー叔母ちゃんの絵だ。

7. In your dream the spider is a symbol of your sister.

君の夢のクモは君の姉さんの象徴だよ。

8. The elephant represents the Republican party.

象は共和黨を表している。

9. That whistle means that the train is about to start.

あの号笛は列車が出発しようとしていることを示している。

10. By raising his hand, he indicated that he understood perfectly.

完全に理解したということ、かれは手をあげて示した。

11. On this team "45" is the signal for an end run.

このチームにとって45とは最終疾走の合図である。

12. "Pinochie" is the name of a game.

「ピナチル」とはあるゲームの名称である。

13. "Thermometer" denotes an instrument for measuring temperature.

「温度計」とは温度を計る器具を指す。

14. "Winnie" is a nickname for Winston Churchill.

「ウイニー」とはチャーチルの綽名である。

論者によれば、右の文例のそれぞれにわれわれが見出すのは、何か他のものの記号として作用している一つのものであり、イタリック(傍点)の表現は、あるものが何か他のものの記号でありうるような種々の仕方を示している。ところで、およそ記号の一般理論なるものが成立するためには、「記号」という概念に何らかの術語的意味が定められなければならないまい。普通に用いられる「記号」という語には右の文例すべてをつつむだけの力がないからである。それではどのような特別の意味において「記号」という術語を用いればよいか。

記号論者としてとりわけ有名な人は Charles Sanders Peirce (1839—1914) であるが、かれが残した数多い「記号」の定義のなかで最も平明であるのはつぎに掲げるものである。

"a sign . . . is something that stands to somebody for something in some respect or capacity."

記号とは、誰かある人にとって、何かあるものをなんらかの点またはなんらかの力において代表するようなものである。

論者 Alston によると、この定義において、X が実際に定義している事柄は "X is a sign of Y." (X は Y の記号)

ある)ということではなくてむしろ“Someone takes X to be a sign of Y.”(ある人がXをYの記号とみなす)ということである。このばあい「XはYの記号である」が真であればこそ、解釈者は適切な反応を起すことになるが、逆に、記号を解釈する人ががわに適切な反応の生ずることは、「XはYの記号である」が真であるための必要条件でもなければ十分条件でもない。必要条件でないのは、もしも急な脈搏が本当に発熱の徴候であるとすれば、誰かが認めるか否かにかかわりなく、それはそうであるからだ。また十分条件でないのは、たとえ人々が梯子の下を歩くのは災難の前兆であるかのように嫌がるとしても、だからといって梯子が災難の前兆であるわけでもないからである。こうして、そもそも「ある人がXをYの記号とみなす」とはいかなることかの詳細な吟味こそ新しい課題になるとみてよからう。そしてこの方向をすすめば、動詞“stand for”(代表する)の意味に重点がおかれるはずである。

さて、その意味を討究する道は通例二つの形式をとり両者ともすでにバース自身の思索に現れていたと指摘しつつ、論者はそれぞれを“ideational”〔觀念ニ還元シテニク〕および“behavioral”〔行動ニ還元シテニク〕と呼ぶ。ideationalな意味でとらえると“X stands for Y (for a person P).”(XはYを代表する——ある人Pにとって——)とは“When P becomes aware of X, it calls Y to mind.”(DがXに気づくとき、XはYを思いださせる)というものである。他方 behavioralな意味では“When P perceives X, he is led to make some behavioral response appropriate to Y.”(DがXを知覚するとき、PはXに適合する何らかの行動上の反応を起すように仕向けられる)ということである。この後者の方向で積極的に活躍した研究者には Charles Osgood (1916) — “Method and Theory in Experimental Psychology, 1953” と Charles Morris (1901) — “Signs, Language, and Behavior, 1946) の二人が挙げられよう。しかしながら、このようにして開けてくる道をすすめたとしても、具体例に即してみればたちまち明かになるように、記号の解釈、「代表する」ということの解釈には種々の難問が生じてきて、記号の一般理論を妥当なすがたで樹立することはむずかしいのである。

さきに掲げた十四文例すべてに共通する包括的な特徴を孤立させてとりだすことは困難であり、そのような試みはむしろ諦めた方がよい。とはいふものの、それらをいくつかのやや小さい群に分類してそれぞれにみられる類似点と差異点を指摘することは有用であり、そうすることによって記号と象徴サイン シンボルの区別も露わになるであろう。分類はさまざまな仕方でも可能である。例えば人為的記号(文例3、5、6、8-14)と自然的記号(1、2、4、7)に分けることができる。だが、もっとも鋭く深い分類は(1)-(4)と(8)-(14)とのあいだに生じている根本的な区別によるものであると論者は言う。第一群に属する陳述が真であるためには実例XおよびYが規則正しく相関し、Xが存在するときには、つねにもしくは通例、多少とも正確に明記しうる時空関係をXに対して保ちつつYも存在しなければならぬ。陳述(1)が正しいのは、ある人が急な脈搏をもつとき、この人の熱の出るのが一般的であるばあいに限られる。陳述(2)および(3)についても同様のことが言える。これに対して、第二群に属する陳述が真であるためには、問題の記号を一定の仕方でも利用する規則的習慣の現存していることが必要である。しかもこの一点さえ保証されれば、それだけで陳述は正しいものとされる。実例Xが何らかの仕方でも実例Yに規則的に相関することを示す必要もないであろう。実際いくつかの例ではそのような相関関係はみられないし、また他の例でもふつうには相関ありとしても、だからといって当の陳述が真であるためにそのような関係が絶対に不可欠とされているわけではない。

このように、事実に戻元してみると二つの群には鋭い区別があると思われる。そして一方の問題は、事実として一定の相関関係があるということであって、Xが一定の仕方でも利用されているというようなことではない。この群にあっては、Xは断じて利用されたりはせず、ただ生起するのである。他方の問題は当該のXが利用される仕方にあつて、XがYと結ぶ相関関係などではない。ところでベースは諸々の記号に関してきわめて重要な三つの分類を行つてきた。それは *icon* [イコン]、*index* [指数]、*symbol* [象徴] という三分類である。*index* は "a sign which refers to

the Object that it denotes by virtue of being really affected by that Object.” (あるものの影響を現にうけているためたゞれ(＝当の記号)が指すこととなる当のものに及ぶような記号)と定義され、symbolは“a sign which is constituted a sign merely or mainly by the fact that it is used and understood as such.”(そのようなものと理解されて用いられるという事実によつてのみ、もしくは主としてこの事実によつて、記号となるような記号)と定義されている。とすれば、さきにみた第一群はパースの「指数」のばあい<sup>に</sup>当り、第二群は「象徴」のばあい<sup>に</sup>当るとしてよからう。象徴はふつう、慣習的意義をもつ何ものか (something with a conventional significance) とか、慣習によつて意味をもつもの (something which has meaning by convention) とか、<sup>この</sup>パースの定義とは異なつてゐる。この点については一言しておかなければなるまい。二つの定義はもし慣習 (convention) という術語を字義通りにとらなければ同義とみてさしつかえない。けれども、言語の慣習的性格を強調する人々は、字義通りにとれば明かに誤りであるような事柄を語つてきた。例えば「語が意味をもつのは、言語を用いる人々が語を一定の仕方<sup>で</sup>用いることに同意しているため」とか、「語が現に意味しているような意味をもつのは専断的な認可による」とか、「語は共通の慣習によつて採用されている」という類である。だが同意とか認可とか慣習などというものが、もしこれらを字義通りにうけるとすれば、言語の起源や発展にとつてほんの瑣末な役割しか演じていないことはいくらでも理由を挙げて説くことができる。社会の起源を説くさいに採られる社会契約説は、実はこの説の樹てられる当代の政治的秩序に関して若干の真理を表現する擬似歴史的な便法にすぎないのであるが、これと同様に、右のごとき言語の説明も、一定の仕方<sup>で</sup>用いられている語の使用法を語るることによつて、当代の言語の実情に関する真理を表現しようとする擬似歴史的な便法とみなすべきものである。

パースの定義する記号の第三型 icon とは “a sign which refers to the Object that it denotes merely by virtue of



characters of its own." (記号自身が具えている諸性格を頼りとしてのみ、それ(= 当の記号)が指すことになるものに言及するような記号)である。例えば布地があつて、一断片Xがその布地と類似性をもてばこそ、その布地の見本とみなされるばあい、Xの指示作用は類似性を根拠にしており、因果的連関や慣習的連関に基づいてはいるわけではない。「アイコン」と呼ばれるものはこのような事例に生じている。それでは、前掲十四の文例のうち「指数」「象徴」に数えられた以外の例(5)(6)(7)は「アイコン」のばあいに当たるとみてよいだろうか。

(5)および(6)において、(5)では抽象の度合が高いとはいへ、類似性は重要な役割を果している。だが二つの陳述が真であるためには類似以上のものが要求される。当該の絵より一層スージ叔母に似ていながら、しかも誰か他人の絵であることはあろう。決定的な点は、他の絵とは異なつて、当該の絵がスージ叔母をモデルに肖像画として描かれたという事実にある。そこで論者 Alston はこの(6)を「不純なアイコン」(an impure icon)の例とする。類似性は役割を演じているものの、それはただ制作時の事情や制作者・受容者の意図に結びついていることだからである。このような例では、記号はアイコンでもあれば指数、象徴でもあるとみなされよう。(5)のばあい、それが何の図解であるかを知り、そこからエンジンを読みとる術を会得するにはまず図の特徴に注目するわけだが、そのさい例えば機械自体に関りないが注意をひくために色で印された点があるという類の慣習的便法が採られており、このようなことが図解のアイコンとしての在り方を不純にしている。語も用いられるが、これは図解の各部が何を表すかを指示するためのものである。とすれば図解においてアイコンの要素が成立するところは、図解各部の空間関係が、類似性を通じて、エンジンそのものの各部に存立する空間関係について何ごとかを教えるものとして受取られる、その仕方にある。

分析がさらにむずかしくなるのは(7)の例である。勿論このようなむずかさの一因はフロイト派の象徴理論が曖昧なことにもある。姉に対するときとクモに対するときとの情動的反応に類似性があり、これを根拠に観念の連合が生

じ両者が結合するといふのであろうが、しかしこのような事態を完全に語りつくすには、クモが夢のなかで姉の象徴として機能するとはどういふことを明晰に説明しなければなるまい。ところがそれができるためには、フロイト派理論の現状は一層の発展を求められる段階に留まっているのである。夢の象徴から宗教の象徴へと目を移してみると、パースの言う純粋なイコンに最も近いのは宗教的象徴であるかと思われる。宗教によっては火を生命の象徴などとみなすが、このような反応は、たとえ信者が言葉であからさまに語りだしたことはなかったにせよ、両方に感じられる類似性に根拠をもつものであろう。だがここでも、事態を明確に把握することは周知のごとくきわめて困難なのである。

パースの分類による「指数」と「象徴」のあいだには根本的な差異がある。にもかかわらず、象徴を指数へ還元しようとする試み、少くとも両者が一見したところよりはるかに密接に関係し合っていることを示そうとする試みはしばしば行われてきた。これに成功すれば、語が何か或るものの現前を示す信頼すべき指標として機能するのは——たといそのような指標とみなされるのは何らかの慣習が現存するためであるとしても——語にとって本質的なことなのだ、と明すことができようといふのである。哲学者ロックは話者の心にある観念の記号として語をとらえた。すなわちかれの見解によれば、そのような在り方で記号として規則的に機能することこそ、有意味の語にとって本質的な事柄なのであった。観念を脳裡の神経過程におきかえ、発語は目にみえぬ内部の進行を外に表す記録とみなす説はロックの立場を現代に移したものであろう。ところでこれらの思弁的仮説を全くはなれても、発語がさまざまな事柄の指標として働くことは疑いもなく正しい。例えばある人がくらしい調子で "The war in Vietnam is going badly." (ヴェトナム戦争の具合はよくない) と語るのを聴けば、これを、この人物が国際問題に関心のあること、戦争介入に賛意を寄せていること、ヴェトナムについて聞き知っていること、英語を知る人であること等々の指標とみなすことがで

きるのである。これほどまでに発語が記号として機能する事実を思えば、言語を一種の記号総体として扱うのが適切と考へる傾向の強まるのも当然である。

さて、前掲十四文例から明かであるのは、象徴と呼ばれる群には、ふつう言語に属するとは言われないような事項が多く含まれていることである。このような非言語的象徴と言語的象徴との関係は複雑である。

論者 Alston の記述はここで終る。本文中にベース、オズグッド、モリスについては言及があったが、ほかに参考文献として挙げられているものは数少い。それらすべてを記しておく——。

Susanne K. Langer: *Philosophy in a New Key*, 1942.

Wilbur M. Urban: *Language and Reality*, 1939.

Philip Wheelwright: *The Burning Fountain*, 1954.

Henry H. Price: *Thinking and Experience*, 1953.

ほぼその全容を以上のごとく移してみたものが、今日の代表的な哲学事典のひとつにみられる「象徴」の扱いである。これをみれば、「象徴」の語について端的な定義をもとめる者にとって事態はまことに心許ないと言わざるをえないであろう。けれども、記号乃至象徴の機能および構造は日常言語の用法に明示されるはず、という確信を是認してしまえば、このような結果にいたるのも避けられないことかと思われる。日常言語の表現のなかで扱われるかぎり、象徴と目されて語りだされるものも、その機能の面では他の諸々の記号のばあいと明確な区別をたてることわめてむずかしいであろうし、したがってその構造の解明については記号の一般理論を前提することが必至となる

う。この点であらためて記号論者パースの姿が大きく浮びあがってくるわけであるが、さきに言及されているところだけでも非凡な鋭さを見せるパースを理解することは今後の課題としておかなければならない。

ところで、このように覚悟を定めた上で率直な疑問に立返るならば、それは、そもそも「象徴」と解される事象はこれを記述する言語表現を介してしか論じられないものなのかというひとことに尽きる。右の事典の最後は、象徴を語る文例にはふつう言語に属するとは言われぬような事項が多く含まれているものであり、このような非言語的象徴と言語的象徴との関係は複雑である、と結ばれていた。だが、象徴を論じるとすれば、むしろこの末尾に記された事態こそ解明すべき第一の課題としてまず樹てられ、そこから一切が始まるはずではなかったのか。そのとき生物全体のみならず独自の地位を占める人間の在り方がその高度に発達せる特異な象徴操作との関連において闡明される必要を生じ、この問題に関する古典的論述を挙げてゆくうちにわがホワイトヘッドの見解にも然るべき顧慮が払われたのではなかったか。性急に走れば私にはこのように思われるのである。参考文献の一つに挙げられているランガの著作は「偉大なる師友」ホワイトヘッドに捧げられたものであり、人間の非言語的な象徴作用乃至活動に注目して、その実態を鮮明に描きだそうと努めた啓蒙的な好著である。つぎにはこれに拠って、ホワイトヘッドの位置を定めるべき視界の範囲をひろげてみたい。

## 二

哲学史をみれば、いかなる時代にせよ各時代は専心没入する固有の問題をもち、そしてある問題がその時代固有のものであることは当の問題の扱い方に示されるが、その扱い方とは発せられる問いの形式に窺い知られる、と書出し

たランガー女史は、その著書『Philosophy in a New Key, 1942.』(Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 3rd edition 1967. 邦訳『シンボルの哲学』岩波書店)第一章において、この観点から西欧哲学史の全体を概観したので、現代すなわちわれわれの科学時代はその母胎であった近代の経験論とは比較にならぬほど深い哲学的問題を生みだしたと指摘する。女史によればそれがシンボルの問題にほかならず、これを用意したのは数学者たちの営為であった。

数学者は感覺的性質は全く問題とならない項目だけを扱うが、この人々の与件こそ任意に定められた音声乃至標識すなわちシンボル〔記号〕である。「そのようなシンボルの背後には人類がこれまでに果してきた最も大胆で純粹かつ冷徹な抽象作用が横たわっている。事物の本質や属性について思弁するスコラ学者も、だれひとり、代数学の抽象のごときものに近づけはしなかった。けれども、具体的な事実に関する知識を誇り、経験の明証のほかいかなる証明をも斥けようとした当の科学者たちが、数学者の示す証明や計算を、時にはわざわざ虚構とさえ公言される無形のものを受入れることには、少しもためらいはしなかった。ゼロ、無限、負数の平方根、通約不可能量、四次元などはすべて、研究室では何ひとつ疑われることもなく迎えられたのである。」(原文一八頁)そのような数学に秘められた力は何であるのか？

数学者はおよそ事物の現存とか実在とか効能とかについては全く語ろうとしない。この事実こそその秘密があるのだ。数学者の関心は「事物をシンボルで示すこと」の可能性、また事物が相互にむすび合う関係をシンボルで示すことの可能性にあり、かれの扱うものは与件ではなく概念である。数学を構成するものはシンボルにはかならない。そのような構成体は実体についてでなく諸々の関係についてこそ意味をもつのであり、実在の何ものかはそれに対応することもあろうが、逆にそのような構成体が実在のうちに横たわる事項であると考えられることはない。数とか度数とか、その他同類のものは、実在する対象の實在的性質を意味しているにすぎないのである。

科学者が数学の力と真理にいだく信念は絶対であるために、かれらの仕事では次第に観察が少くなり、計算が多くなった。資料を雑然と集めて図表化したたりすることはなくなり、代って、実在すると想定されたもの、すなわち可能と考えられる意味を数学的な関係項へと割当てて、その論理的帰結を導きだし、ついでこの仮説を実際の経験的結果に照して検証するために一定の厳しい実験を行うという手続きがふまれるようになった。今日の研究者は現場の実験を行ったガリレイやフランクリンとはほど遠いところに立っており、観察に代って今日では意味 (*meaning*) という問題こそ光を浴びていて、科学における経験論の勝利なるものも、実は、われわれの感覚・与件は主としてシンボルである、という驚くべき真理のために、危殆に瀕しているのである。

数学はいとも静かにはあるが純粹理論の方向に沿って、いかなる実験技術にも劣らぬほど鮮かに力づくよく発展し、発見や観察と着実に歩調を合せてきた。そして人知の体系はいまや感覚的情報の歴大な集積としてでなく、「シンボルにほかならぬ事実と、これら事実の意味にほかならぬ法則」(二頁)とから成る構造体としてわれわれの面前に建っている。こうして現代のために新しい哲学的主題が提起されたのであるが、それは科学を包括的に理解するという認識論上の課題である。しかも以前には感覚・与件こそ究極的なものとして課題を解く手懸りとされていたが、今日ではシンボリズムの力がその代りを努めるにいたった。

認識論のなかにいまや新たな創造的構想がみえてきたことは、以下に列举する(二十二年ばかりの著作表題をみるだけでも明かであらう)。C. K. Ogden and I. A. Richards: *The Meaning of Meaning*, 1923. Ralph Munroe Eaton: *Symbolism and Truth*, 1925. Ernst Cassirer: *Die Philosophie der symbolischen Formen*, 3 Bde. 1923, 1924, 1929. A. J. Ayer: *Language, Truth and Logic*, 1936. H. Noack: *Symbol und Existenz der Wissenschaft*, 1936. R. Carnap: *The Logical Syntax of Language*, 1935 (German ed. 1934). R. Carnap: *Philosophy and Logical Syntax*, 1935 (German ed.

1934). Gustav Stern: *Meaning and Change of Meaning*, 1931. A. N. Whitehead: *Symbolism—its Meaning and Effects*, 1927. Charles W. Morris: *Foundations of the Theory of Signs*, 1938. Paul Helwig: *Seele als Äußerung*, 1936. A. Spaier: *La pensée concrète—essai sur le symbolisme intellectuel*, 1927. R. Gättschenberger: *Zeichen, die Fundamente des Wissens*, 1932. Wilbur M. Urban: *Language and Reality*, 1939. Ludwig Wittgenstein: *Tractatus Logico-Philosophicus*, 1922. Louis Grudin: *A Primer of Aesthetics*, 1930.

だがランガーのみるところ、新たな調べが奏でられているのは本来の哲学部門だけではない。シンボル使用やシンボル解説がきわめて重要と判ったために予想以上の発達をみた専門分野が少くとも二つはある。一つは現代の心理学であり、もう一つは現代の論理学である。前者についてわれわれは精神分析の出現に刺戟をうけ、後者については記号論理学と呼ばれる新しい手法の勃興を目撃している。前者は医学に発し、後者は数学から生じたもので、相互の交渉はなく、両者の進展が時を同じくしているのは全くの偶然と思われる。とは言いながら、それでもランガーはなお、両者はともに同じ創造的構想を、すなわち現代の哲学的関心を捉えてこれを鼓舞してやまぬ同一の理念を具現したものであるという信念を明示し、その理由は、両者いづれもそれぞれの仕方で symbolization (象徴化・記号化) の威力を発見したことにありと述べるのである。

ひきつづきランガーはつぎのように語る。「科学技術の興隆こそは、ほぼ二世紀にわたりわれわれの思考を支配してきた物理学の基本概念が本質的に健全なものであることを証す、何よりすぐれた確証である。それら基本概念は知識を生み、実践を生み、体系的理解を生んだし、そのことを思えば、われわれにきわめて大胆明確な世界観を与えてくれたことも少しも不思議でない。それら基本概念はあらゆる物理的自然をわれわれの手にひきわたしてくれたのである。だが、まことに奇妙であるのは、この壮大な冒険からいゆる精神科学がほとんど何の稔りも得てこなか

ったことである。」(二三頁) 旧来の論理学や美学、あるいは社会学や心理学を顧みるがよい。物理学上の諸概念を導入しての試みは次々に失敗せざるをえなかった。これは物理学者の図式が誤っているためであろうか。そのようなことはない。その図式はどこまでも理に適っている。ただし、精神に関するさまざまな現象を研究するためには、物理探究のばあいにおけるように多くの主導的疑問を生みだせもせず、建設的な構想力をかきたてることもなく、役立つものでなかっただけのことなのである。

ところが今日、過去の経験論の時代が何の革命も生みだせなかった人文の諸領域に、さきの文献からも窺い知られるごとく、シンボルを重視する思潮が昂まってきた。これは決して科学の規範から直接に生じたわけではない。しかもそれは少くとも二つの、相異なり、見かけは相容れがたい流れに沿って進んでいる。その一つは論理学につらなり、認識論上の新たな問題に直面して、科学を積極的に評価させ、確実性の探究を上げましている。もう一つは反対の方向へ走り、精神医学、すなわち情動や宗教や幻想などいわゆる知識以外のものの探究へと向っている。けれども、これら両方向のいずれにもひとつの中心的主题がみとめられる。それは、受動的なものとしてでなく構成的なものとしての人間的反応 (*human response*) という主題である。認識論者と心理学者の双方はシンボルの実体や機能についてはなかなか相容れないが、しかし、人間の反応という構成的過程の鍵をなすものが *symbolization* であることに関しては同一の見解をとる。一方は科学の構造を研究し、他方は夢の構造を研究する。いずれもシンボリズムの本質についてそれぞれ独自の仮説をみせ、ここに双方の差異が生じているのは事実である。だが、哲学的に重大なこととしては、双方がいずれもシンボルの意義について同一の態度を示している点をこそランガーは重視するのである。

こうして序論というべき第一章の最後を女史はつぎのように締めくくる。――

「神秘主義であろうと、実践的であろうと、数学的であろうと、それは大した違いでない。とにかくシンボル化と



いう根本的觀念にこそわれわれは人文的問題すべてを解く主音をもっている。そのなかにこそ心性 ( mentality ) についでての新たな見解が横たわっており、これは、従来伝統のないゆる科学的的方法なるものが曖昧にさせてしまったのと代つて、生命と意識の諸問題を明るく照しだしてくるであろう。まことに創造的な構想であるとすれば、それは独自の確実な方法を生みだして、精神と身体、理性と衝動、自律と律法など今日行詰りをみせているパラドクスを解消してくれるであろうし、古来の語法を棄てさせ、代りに一段と意義の充実せる語句をつくることによって、過去の時代の行場なき議論に新たな打開を与えてくれることにもなる。哲学的なシンボル研究は他の学問分野から借りてきた技法ではない。数学からさえも借りたものではない。それは学の大いなる進歩が手をつけずに残してきた原野に生れてきたのである。おそらくそれは新しい知的な稔りをもたらす種子を秘めていて、来るべき人間理解の季節ともなれば刈入れの日を迎えることであろう。」(二五頁)

さてランガーは右の概観を誌したのち、第二章から第十章にいたる本論を展開するが、それは以下のごとき構成である。第二章 Symbolic Transformation (シンボルへの転換)、第三章 サインおよびシンボルの論理 (The Logic of Signs and Symbols)、第四章 論弁的形式と現示的形式 (Discursive Forms and Presentational Forms)、第五章 言語 (Language)、第六章 生のシンボル——儀礼の根基 (Life-Symbols: The Roots of Sacrament)、第七章 生のシンボル——神話の根基 (Life-Symbols: The Roots of Myth)、第八章 音楽の秘める意義について (On Significance in Music)、第九章 芸術的意味内容の発生 (The Genesis of Artistic Import)、第十章 意味の綾なす織物 (The Fabric of Meaning)。この構成にみられるように、ランガーは本論に入つてまず象徴作用の機能を説き、ついで論理、言語、神話、芸術と順を追つて人文の領野におけるシンボルの動態を捉えてゆく。もとよりここはランガーの解明を主題と

するところでないから、これ以上の言及をひかえるが、本論の構成が第一章の概観に示された洞察、すなわち現代の専門分科ではとりわけ論理学と心理学に symbolization 重視の徴候があり、しかもこれら兩者を支えているのは同一の哲学的関心であるという女史の根本的洞察に基づいていることは言うまでもなからう。

それではそのような女史の洞察に示唆を与えた他の思想は見当らぬか。さきには現代の同じ思潮におかれるという文献が並べられていたが、そのなかに特筆すべき論著はないかと問えば、それこそほかならぬホワイトヘッドの『シンボルイズム』であると私には思われるのである。

ランガーは右の第二章でいよいよ自説を展開するにあたり、まずシンボルの使用とサインの使用とのあいだには深甚な相違のあることを解きあかそうと努めるが、それでも、あの条件反射に明白な動物のサイン使用こそは生物発展史における心 (mind) の最初の現れであり、心性 (mentality) の真の始まりである、と言う。なぜならば「誤謬はここに生じ、併せて真理もここに生じるからである。」(二九頁) 顧みれば女史の立論のこの出発点はすでにわれわれがホワイトヘッドにみたところにほかならない。すなわち『シンボルイズム』の冒頭第一章第一節は多様なシンボルイズムの遍在を語り、第二節はそれらの根柢に横たわる根源的シンボリスの存在を指摘し、第三章はこれに迫る方法論上の注意を記したものであったが、実質的な本論に入る第四節はいきなり「シンボルイズムの可謬性」と題されて、そこでは「人間の心性を正しく語るにはつぎの三点を解明しなければならぬ。われわれは、(一)なぜ正しく知ることができるのか、(二)なぜ誤ることができるのか、(三)なぜ真理と誤謬とを批判して区別することができるのか。」と明言されていたのであった。当然ホワイトヘッドの講演はこの要請に対する回答を開陳したものとなっているが、ランガーの著書もまた全篇の末尾は「誤謬はわれわれが進歩のために支払う代価である。」(二九四頁)と結ばれている。しかもこの結語は明記されているようにホワイトヘッドの言葉にほかならず、われわれは右記第一章第一〇節に相似た表現

を見出していた——「水面に映る肉片を取ろうとして、口にくわえた肉を落したイソップの犬の寓話は誰でも知っている。けれども、われわれは誤謬をあまりきびしく糾弾してはならない。精神發達の初段階では、symbolic referenceに生じる誤謬は想像の自由を高める試練なのである。イソップの犬は肉を失った。だがこの犬は自由な想像へ向う道の第一歩を進めたのだ。」

ランガーは一九四一年の序言において、自分の思想は数多くの先人に恩恵をうけているが、それらの人々のなかでとくに「本書を捧げる賢者の筆に成るものについてははつきりと名指しての言及をほとんど行わない。」(xv頁)と述べている。それだけ深く全面にわたって原著がホワイテヘッドの思想に負うてゐることを示唆しなかったのである。本質的には啓蒙の次元に留まるとはいえ、芸術意味論者として新たな芸術哲学を示唆し教導した女史の意義は決して無視できるものではない。そのランガーが独自の芸術論を發展させるに先立ち、人間文化の諸相全般に新しく照明を加えて、おのれの思想展開の準備とした著作がいまなお多方面の関心をひくとすれば、その展望の原理と目されるホワイテヘッドの洞察こそは一段と深く敬重しなければならぬまい。

〔未完〕